



2022.10.17 瀬戸ひなご幼稚園園長 神戸洋美

ネバーギブアップ運動会

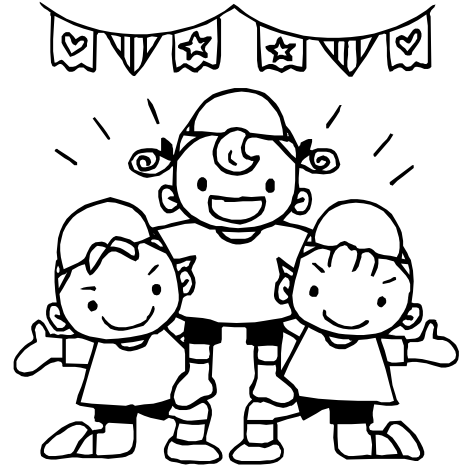
1週間前の今日、運動会でした。あの時、ご挨拶で「執念の運動会、ネバーギブアップ運動会」とお話しました。前日から午前中まで雨が降り続く天気、「まさかこの中で運動会？」と思われた方もみえたのではないのでしょうか。

10日の天気予報は微妙でした。前日の予報では、午前中は雨で午後からは晴れそう。気象レーダーでは10時頃に雨雲が抜ける、その後に運動場を整備する時間を考え、8時30分にスタートする運動会を3時間遅れの11時30分から行くと、前日にメールでお知らせしました。(当日、4時間遅れに変更しました。)

予報通り、前日から降り続けている雨はまだやみません。運動場は水浸しです。テレビの気象レーダーを見ながら、「雨雲よ、早く抜けてくれ。」とひたすら祈りながら、すぐに準備を始める体制で待ちました。雨が上がると同時に、運動場の水たまりをスポンジで吸い取り、砂場の砂をバケツで運び入れ、運動場を整備。するとお日様も出てきて、午前中の雨がうそのように晴れ渡り、午後からの運動会は暑すぎるくらいの気温の中で、無事に開催することができました。

園児たちは生き生きとした笑顔で、練習以上の演技をご家族皆様の前で披露してくれました。転んでも平気。組み立てでお腹がぬれても頑張りました。お洗濯が大変だったかもしれません。昨年まではコロナにより、保護者お二人しか参加できませんでしたが、今年は車1台に乗れる人数までとしたことで、ご祖母様もおみえになり、ご家族皆様の応援に、子どもたちも張り切った姿を見せてくれました。

子どもたちや先生たち、そして保護者の皆様方の「ネバーギブアップ」という強い気持ちが一つになり、運動会の開催につながったと思います。ご協力に心より感謝申し上げます。



十月上旬の県議会委員会、神戸洋美議員(自民)は、自身が経営する幼稚園で約十五年前に受け入れた、足に障害のある女児の話を披露した。

近くの園はすべて入園を断られたと知り着いたという。他に行き場がないと思つと拒めなかった。女児の主治医に言われたのは「他の子と同じように接して」。女児は園内で廊下を這い、屋外は歩行器を使って遊んだ。他の園児も自然と支え、良い雰囲気のまま

理想の姿

内堀 外堀

れた。だが、どんな場合も態勢が整うかという点、厳しいとも感じた。国連が今秋、社会の分断を生むとして、障害のある子を分離する特別支援教育をやめるよう勧告した。障害のある子とない子を共に育てる「インクルーシブ教育」は理想。でも、手厚い支援ができる特別支援学校なども一定の役割がある、と神戸さんは考える。「とても複雑な問題だけど、少しずつ理想に近づきたい」。模索が続く。(安福晋一郎)

インクルーシブ教育とは？

左の記事は、昨日中日新聞の名古屋版に掲載された記事です。これは国連の障害者権利委員会が、障害者権利条約に基づき、日本政府に対して障害者を分離した特別支援教育の中止などを求める勧告が発表されたため、私が所属する「教育・スポーツ委員会」で、私が質問したことを新聞が取り上げてくれました。質問の詳細は、私神戸洋美のホームページの「議会レポート」に掲載してありますので、ご覧ください。

記事にもありますように、春日井の園で受け入れたお子さんの話です。主治医の先生は「障害はこの子にとって、一生受け入れていかなければならない。だからみんなと同じように、クラスで生活させることが必要なのだ。」と言われました。私は「目からウロコ」状態で、自分が障害のある人に対して、上から目線だったことを恥ずかしく思いました。共に生活する中で、他の園児もさりげなくサポートし、良い経験だったと思います。お子さんは無事に卒園しました。

ただ日本の教育は、その子の能力に合わせた特別支援という形で学校を設置してきました。それが海外からは差別と言われてしまったのです。理想と現実とのギャップをどのように埋めていくのか、教育現場を見直す時に来ています。